

第 11 回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「おばあちゃんのドライバー」

埼玉県立浦和第一女子高校 1 年 上田 侑乃



賢 治 の ま ち か ら
全国高校生★童話大賞



優秀賞〈銀の星賞〉

『おばあちゃんのドライヤー』

埼玉県 浦和第一女子高等学校一年

上田 侑乃^{ゆきの}

ふうちゃんは、おばあちゃんと一緒に暮らしている。ふうちゃんと、お母さんと、お父さんと、おばあちゃんの四人家族だ。

おばあちゃんは、ふうちゃんが四歳の夏にふうちゃんの家に来てきた。それまでは「きゅうしゅう」というところに住んでいたらしい。ふうちゃんの「おじいちゃん」はとうの昔に死んでしまっていた。ふうちゃんは「おじいちゃん」を知らなかった。

だからといって、ふうちゃんはおばあちゃんのことについてたくさん知っている訳でもなかった。

ふうちゃんの知っていることは、おばあちゃんが、朝とても早くに起きて、日めくりカレンダーを丁寧に破ることで、

ご飯を食べるのがふうちゃんよりも遅いことで、時々一人で何かお話していることで、いつも古いドライヤーを使っていることだった。

おばあちゃんは、おうちでのお仕事は何もしていなかった。それが、やらないのかわかないのか、ふうちゃんには分からなかったし、よく考えたこともなかった。ただ、ふうちゃんのお母さんは、おばあちゃんが何もしなくても全然怒らなかった。なのに、ふうちゃんには「お手伝いをしなさい!!」とものすごい顔で怒るから、ふうちゃんはおばあちゃんはずるいなあと思っていた。

そんなおばあちゃんでも、お風呂をあがったふうちゃんの、濡れた髪を乾かすのだけはいつもやってくれた。お母さんが乾かしてくれないのではなく、ふうちゃんがお風呂から上がると決まっておばあちゃんのお部屋に行くのだった。

そんな時でもふうちゃんはおばあちゃんと何も話したりしない。ただ、ふうちゃんはおばあちゃんが髪を乾かしてくれるのが好きだった。



おばあちゃんが古いドライヤーのスイッチをかちんと入れる。静かな部屋にブーンという低い音だけが響く。それが気持ちよかった。

おばあちゃんはいつも、ふうちゃんの髪の毛を頭のとっぺんの方から乾かしていった。ドライヤーの中から漂う、埃ほこりが焼けるような古くさいにおいもふうちゃんは好きだった。耳の後ろに時々当たる、柔らかいおばあちゃんの指先が、何とも気持ちよかったし、弱いけれど暖かい風が耳にかかってくすぐったかった。髪が引つ張られて、それについていくように頭の皮も引つ張られるのも良かった。眠ってしまいそうなほどの気持ちよさの中で、ふうちゃんはいつもああ幸せだなあと思うのだった。

おばあちゃんは、古いせいで風も弱く、時々すごく熱くなる真っ黒なドライヤーで、いつも長い時間をかけてふうちゃんの髪を乾かした。何も話さず、ただ黙って乾かしてくれた。

そんなおばあちゃんのドライヤーは、おばあちゃんと一緒にふうちゃんの家で三回目の夏を迎えた。

ある日、おばあちゃんが「死んだ」。ふうちゃんは「死んだ」といわれてもよくわからなかった。お母さんも、お父さんも、泣いてはいなかった。お母さんは、

「おばあちゃんはもう帰ってこないのよ」

といった。でも、おばあちゃんは今畳の部屋で静かに横になっている。お父さんは、

「もう二度とお話できなくなるんだよ」

といった。でも、もともとふうちゃんはおばあちゃんとあまり話をしなかった。それで、ふうちゃんは悲しいとも、残念とも思わなかった。

ご飯を作る人がいなくなったわけでもなく、掃除が行き届かなくなったわけでもなく、特に生活に変化はなかった。

だけど、カレンダーはおばあちゃんが死んだ日からずっとそのままになっていたし、それをふうちゃん以外、気づいている人は誰もいなかった。そして、ふうちゃんがお風呂上がりにおばあちゃんの部屋に行った時、そこに待っている人は誰もいなかった。ふうちゃんは頭の片隅でぽつんと思った。

「ああ。おばあちゃんはいないんだった。」



ふうちゃんはとても久しぶりに、お母さんに髪を乾かしてもらった。お母さんの最新式のドライヤーは、ガーガーと凄^{すご}い音をたててふうちゃんの耳に強い風を吹き込んだ。小さな窓からでる変な空気においてはなんだか気持ち悪かった。耳の後ろにお母さんの手入れされた爪が刺さって痛かった。

そして、ふうちゃんが今までとのあまりの違いにびっくりしている間、あっという間に髪はぱさぱさになった。耳にはまだガーガーとドライヤーの音が残っていた。

ふうちゃんは、ぱさぱさの髪を触りながら、お母さんは髪を乾かすのが下手だなと思った。どうして私が心地よくなるように乾かしてくれないのだろう。もういい。自分でやろう。そしてふうちゃんは、初めて自分でドライヤーにスイッチを入れ、頭の上で振りかざした。

さつきと同じ不快な風と音と熱さを感じた。そして耳の後ろには誰の指も当たらない。自分で耳の後ろに触れても、指が少し堅くて何も気持ちよく無いのだ。柔らかかったあの指は無い。

おばあちゃんはもういないのだ。

ふうちゃんはドライヤーのスイッチを消してぼんやりと思った。もう二度とあの風を、指を、心地よさを感じることはない。ふうちゃんのお風呂上がりをあの部屋で待つ人は、これから、いない。

おばあちゃんはもういないのだ。

「死んだ」とはそういうことだったのだ。もう二度と、なくなることだったのだ。ふうちゃんの中から、涙がひとつぽとんと落ちた。そうしたら涙が止まらなくなって、ふうちゃんはわんわん泣いた。その声に驚いたお母さんとお父さんがすっ飛んできて、大泣きしているふうちゃんを一生懸命なぐさめようとした。けれど二人は、どうしてふうちゃんが泣き出したのか分からずに首をかしげていた。

それからふうちゃんは、一切髪をドライヤーで乾かそうとしなくなった。乾かそうとするたびに、耳に触れないおばあちゃんの風が、指が恋しくなつて、泣いてしまいそうになるからだだった。いつも一番にお風呂に入って、髪をタオルでごしごしふき、後は勝手に乾くのを待った。お母さんは最初の頃は

「風邪を引くわよ。女の子なんだからきちんと乾かしなさいな。」



と言ったけれど、ふうちゃんが耳を貸さないのであきれそのうち言わなくなった。そんなふうに住生活しているうちに、ふうちゃんはいつも髪を短く切るようになった。その方がより早く、乾くからだ。

そして五年が過ぎていった。ふうちゃんは十二歳。小学六年生になった。まだ髪は短いままだった。ドライヤーを使わないのがくせになり、少しでも伸びるとすぐに切ってしまった。でも、ふうちゃんは何故自分なぜがドライヤーを使うのを止めたのか、さっぱり覚えていなかった。そして、おばあちゃんのこと、思い出すことはなかった。

ふうちゃんが毎日を楽しく生活している中で、おとうさんの転勤が決まった。ふうちゃんは引越すことになったのだ。ふうちゃんはこの知らせに喜んだ。友達と離れてしまうのは寂しいけれど、新しい場所で新しい家に住み、新しい友達が出来ると思うと胸がワクワクした。開いてもらったお別れ会で泣いたり、住むことになる家を見に行ったり、引越しまでの日々を忙しくも楽しく過ごすふうちゃんにある日、お母さんが言った。

「ふうちゃん、おばあちゃんの部屋の荷物の整理、頼んでもいいかしら。」
ふうちゃんはここ何年も、おばあちゃんの部屋に入っていないかった。おばあちゃんが「死んで」半年ほどした頃から、物置として使い始めたのだ。だから、今のおばあちゃんの部屋には、所狭しとガラクタが積んであって、ふうちゃんはげんなりとした。

お母さんの、
「特に必要無ければ全部捨てて良い」
という言葉通り、ふうちゃんは出てくるものをどんどん捨てていった。古くてしみだらけの本の山、おばあちゃんの服、汚れたぬいぐるみ、何年も前の年賀状の束、全部全部捨てた。

ふうちゃんが頑張っていると、お母さんが様子を見にのぞいてきた。そうして、ふうちゃんが「残すもの」として部屋の脇に積んだ数少ない品々の中から、真っ赤な背表紙のアルバムを取り出した。

「あら、お母さんたら。」
お母さんの声にふうちゃんは振り向いた。

「若い頃のお母さん、私にそっくりなのね。」
「おばあちゃんがお母さんに似ているの？」



とふうちゃんはお母さんに聞いた。お母さんはうんうんうなずいた。「ほら、見て。」

差し出されたアルバムを見ると、大きな写真が一枚、丸々ページを占めている。男の人と、女の人が、晴れ着姿で並んでいる。

「おじいちゃんとおばあちゃんの結婚写真だよ。」

とお母さんは言った。ふうちゃんは、じつとその写真を見つめた。

写真の中のおばあちゃんは、ふうちゃんの知っているおばあちゃんでは無かった。若くて、笑顔が素敵で、「おばあちゃん」ではなく「お姉さん」だった。ただ、真っ白なお化粧をしているせいか、お母さんに似ていないとふうちゃんは思った。

「私に似ているな」

と、思った。笑顔の目元はそっくり、ふうちゃんのものだった。

そんな風におばあちゃんが遺していった色々なものを掘り出しながら、ふうちゃんは少しずつおばあちゃんのことを思い出していった。閉めきった障子からオレンジ色の光が射してきたころ、その光の中にふうちゃんは何か黒いものを取り上げた。そして、思わずアツと声をあげた。

それはドライヤーだった。真っ黒な、古いドライヤー。ふうちゃんはこれを覚えていた。おばあちゃんが、これで毎日私の髪を乾かしていたのだ。なぜだか心臓がドキドキする。大好きだったドライヤー。いや、ふうちゃんが好きだったのはドライヤーではなく、おばあちゃんがこれでふうちゃんの髪を乾かすことだ。急に懐かしくなってきた。そして同時にふと思った。まだ動くのかな。

その晩、ふうちゃんはお風呂をあがって、久しぶりにおばあちゃんの部屋への廊下を歩いた。ふすまを開けると、昼間頑張ってきたきれいにした部屋がふうちゃんを迎え入れた。あのころの家具はほとんどない。でも、ドライヤーがぼつんと、待っていた。ふうちゃんがふと鏡に目をやると、ふうちゃんの目が向こうからも見返してきた。おばあちゃんそっくりの目。違う、おばあちゃんの目だ。

「ああ。」とふうちゃんは息を漏らした。おばあちゃんはいないと思っていた。もう永遠に会わないと思っていた。けれど、こんな所にいたんだね。ただいま。ふうちゃん、今お風呂あがったよ。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

ふうちゃんはおばあちゃんのドライヤーのスイッチを、かちんと入れた。
静かな部屋にブーンという低い音だけが響く。それはとても気持ち良かった。